

第35回

「“からだ”と“こころ”のチューニング
～＜建設的な生き方＞のススメ～」

たとえば……。『レイノルズ』という名前を見てこんなふうに感じなかったでしょうか。「外国人だ」「言葉は通じるのか?」「体格がいい!」……etc. こういった固定観念や先入観「～であるべき」といった“とらわれ”が、いつのまにか心の中に住みついてはいないでしょうか。

“建設的な生き方(CL=Constructive Living)”を提唱しているレイノルズさんは、「とらわれた心は人の視野を狭めて、現実からその人を遠ざけてしまう」といいます。

ストレスの多い現代社会、知らず知らずのうちに宿ってしまう“とらわれ”を取り払い、不安や悩みとつき合っていく手がかりを探ります。

11月30日(土) 14:00開会(17:00閉会予定)

【ゲスト】デイヴィッド・K・レイノルズさん(文化人類学者)
伊藤伸二さん(日本吃音臨床研究会代表)

○会場…應典院本堂ホール

○参加費…会員1,000円(一般1,500円・学生1,000円)

※学生は受付で学生証を提示してください。

○主催…應典院寺町倶楽部

○共催…日本吃音臨床研究会

いのちと出会う会

第23回

10月17日(木)

「死にゆく人々
との対話」

話題提供者

ホスピス医 南吉一さんと
阪大医学生のみなさん

枚方「在宅ホスピスあおぞら」代表の南さんは、毎夏、阪大医学生を引率して、アメリカの在宅ホスピスの家庭を訪問研修されています。末期患者が家庭で看取られる現場に立ち合い、その人々の心の内面や看護する家族との語り合いから、若き医学生たちは何を学ぶのか。死の準備教育がテーマです。

第24回

11月21日(木)

「盲目となって見えて
きた人生の意味」

話題提供者

日中総合交流事業アドバイザー 菅野芳宣さん
教師として、また少林寺拳法監督として多くの学校を全国優勝に導くが、84年突然失明、第二の人生として、日中総合交流事業アドバイザー、またパラリンピック水泳優勝者としても活躍されています。絶望的な障害を乗り越え、新しい人生を築き上げたその足跡を語っていただきます。

※いずれも18:30開会、21:00閉会

what's new!
トークカフェOPEN!!

コモンズの新しい試み、「トークカフェ」が期間中オープンします。

3日間だけの限定開催。この機会をお見逃しなく!(詳細はチラシをご覧ください)

また、11/5にカフェを担当してくれる「南船北馬一団」が11/22~24に行う公演のチラシも同封しています。人間なら誰も避けては通れない“老い”と“死”を、若干20代の若き作家がどう見つめ、何を考えたのか。日本劇作家協会新人戯曲賞・受賞作品の再演です。ぜひご覧ください。

【新入会員ご紹介】

(2002年10月17日まで)

前号以降にご入会いただいた方です。

ありがとうございました。

○一般会員

【大阪府】

川上照代 大阪市住吉区

○個人会員

【岐阜県】

松浦 務 土岐市

○学生会員

【大阪府】

住友英治 大阪市東住吉区

【京都府】

吉見友里江 久御山町

サリュ VOL. 34

應典院寺町倶楽部のニュースレター

発行日 2002年10月17日
(偶数月発行)

編集人 池野亮、大塚郁子

川井田祥子

発行所 應典院寺町倶楽部

〒543-0076

大阪市天王寺区下寺町1-1-27

TEL06-6771-7641

FAX06-6770-3147

Salut

應典院寺町倶楽部のニュースレター

vol. 34

サリュ

フランス語で救いの意



「才能は大切な要素だけど、上達するコツは自分がどう向き合うかということ」と、昔ピアノの先生が話してくれた。何かを習得しようと思えば向き合う態度も大切。手習いのはじめはまず心構えから。さて、今年のコモンズフェスタ、テーマは「対話のレッスン」。受け取ったことばを相手に返す対話。おしゃべりは大好きだけど、意見が合わない人と話すのは苦手、という人は案外多いかも。多くの手習いと同じように相手と向き合う「態度」が大事。ちょっと心持を変えて、自分も相手も大切にするための「対話」をしてみませんか。

2002.October

そこに住む一人ひとりが “まちづくり”の主演です！ ～活動のタネをまいた、第34回寺子屋トーク～

9月28日に開催された第34回寺子屋トーク、タイトルは「東京vs大阪 都心(まち)暮らしの愉悦～あなたのまちのタウンマネジメント入門～」。行政や企業、市民の立場でまちづくりに関わっている人など、いろいろな立場の人の参加があり(107名)、終了後のワンコイン交流会也大いに盛り上がりました。当日の内容をレポートします。

“地域雑誌”＝まちの広場

第1部は、作家・森まゆみさんの講演です。森さんが「関東大震災や空襲でも焼けることがなかった歴史のまち、自分たちの住んでいるまちを、もう少しおもしろくしたい」と、子持ちの主婦仲間3人で地域雑誌を作りはじめたのは1984年7月でした。当時はまだNPO(=Non Profit Organiz-

ation)や「TMO(=Town Management Organization)」という言葉はもちろん、「まちづくり」という言葉すらなかったそうです。

「売る側ではなく、暮らしている住民の立場に立った地域雑誌を」「タウン誌というよりもっと文化史的な、地域の歴史を掘り起こして、まちの記憶を呼びさましていくような雑誌を作りたい」と夢を大きくふくらませ、10月に地域雑誌『谷中・根津・千駄木』(愛称・谷根千^{やねせん})を創刊。以来、季刊で発行を続け、現在69号まで発行されています。いまの発行部数は8000部ですが、多いときには14000～16000部発行していたとか。当初からずっと、できあがった雑誌はすべて自分たちで配り歩き、売れ残った雑誌を回収するなど、地域の人々と直接ふれ合う時間を大切にしてきました。

カラー写真や広告のたくさん入ったフリーペーパーがあふれる現代にあって、「活字は無料では売らない!」と決めた森さんたち。お店や商品の宣伝を目的に情報を一方的に流すのではなく、市民一人ひとりが生活者の立場で双方向に意見を言い合えるような、「水平の関係」をめざす地域情報誌として発行を続けています。

実践していく勇氣と強さ

「ふつうの人々の生き死にを活字に残したい」と活動をはじめた森さんたちは、雑誌の発行を続けるうち、さまざまな課題に直面することになります。たとえば、上野の奏楽堂移築に伴うパイプオルガンの修復運動や、不忍池地下駐車場計画反対運動に関わるなど、まちの資源再生や保存の運動にも数多く取り組んできました。

バブル期で地価が高騰した頃、地上げにあって自殺した人や、家庭崩壊してしまった家族など、悲惨な状況も見てきた森さんたちは、文脈を無視してまちを変えようとすることに勇氣を出して異議を申し立ててきたのです。まちづくりは「まちづくり」だともいい、その地域がもっている資源や文化を守ることの大切さを訴える森さんに、自ら実践し続けているからこそもてる“信念”を感じました。

また、谷根千の事務所にはいろんな問い合わせや相談が寄せられます。「まちのクリーニング屋の中でいちばん上手な店はどこか」とか「車イスで入れる店はどこか」と、ときには西日暮里の交番からも問い合わせがあって、まるで無料相談センターのようだといいいます。

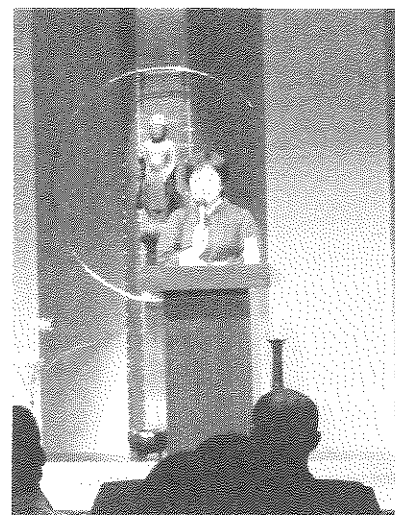
「まちづくりで大切なのは、人と人とのつながりをつくることで、そのためには人の話をきちんと聞くことです」という森さん。実際、『谷根千』の原稿はすべて“聞き書き”で書いてきたそうですが、“聞く”という行為を通して信頼し合える関係を結び、まちの中でなくてはならない存在になっていることを、うらやましく感じた人は多いのではないのでしょうか。

ソフト面から考える“まちづくり”

休憩をはさんで第2部は、大阪大学人間科学部ボランティア講座3回生・松尾洋樹さんのプレゼンテーションで開始。事前に上町台地周辺を歩き、撮影してきた写真を見せながら、「歴史的にも文化的にもすぐれた資源の多いまち」だと紹介してくれました。

その後は、3人のゲスト(京都大学大学院工学研究科助教授・高田光雄さん、大阪大学大学院人間科学研究科助教授・渥美公秀さん、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所客員研究員・弘本由香里さん)と森さんとのトークセッションです。

冒頭、高田さんが「“都市再生”をキーワードにした集まりは、ハード面で語られることが多くて残念に思っています。今日は、都市で暮らしている人が互いに価値を共有しながら、まちのあり方を発見し、

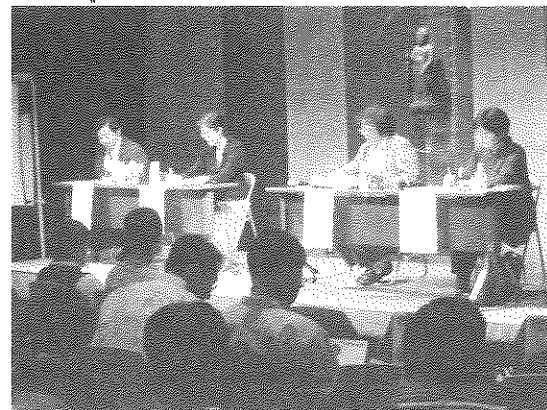


一人ひとりに何ができるかを考えるようなものにしたい」と趣旨を説明。「都心で暮らすこと」をテーマに、ゲストが各自の意見を述べました。

弘本さんは「約1年半前から上町台地で暮らしています。ここは、歴史的に積み重ねられた思いのようなものがあちこちで感じられるし、個々の営みの中で見えないつながりが感じられる、魅力的なまちです。私のような一人暮らしをする人は今後増えていくと思いますが、その人たちがまちとどう関わっていけるか。たとえば住宅は、プライベートの空間をもちながら、他と関わることでできるオープンな部分も併せもつことが、これからますます求められるでしょう。家族をもたない人同士がどういうコミュニティをつくっていくのか。一人になりたいときは一人になれて、参加しないことも許される。でも、助けが必要なときは相互扶助ができるような、風通しのよいまちを私自身もつくってきたいですね」と、人と人、家とまちとのつながりについて話されました。

動ける人からはじめよう

渥美さんは、「まちづくりは何を作っていくことなのか。建物でも、法律や制度でもなく、人と人との関係をつくっていくことだと思いますが、そこで何を共有するかが大事です。都市に住むと知らない人の方が多くなります。話せばわかる、と思ってる人は多いんですが、じつはそうではありません。たとえば大阪弁は、先回りしたり、立場を自在に入れ替えたりするので、『会話は言葉のキャッチボール』というのはあてはまらないんですね。言葉以外の部分、言葉にならない部分をどうやって共有していくか。まちづくりには興味がないという人の方が多数派で、今日の晩ご飯の方が大事という人もいるでしょう。そういった人たちと同じまちに暮らすとき、何



を共有できるかが大きな課題だと思っています」と問題提起をされました。

森さんからは、「いま話されたように、まちづくりをやる人は多数派ではありません。私自身、最初の頃はいいことをやっている気分になっていましたが、お寺の和尚さんに『あなたの方の活動を批判するのも民主主義ですよ』と言われました。

ただ、まちづくりは、やりたくてもやれない人がいるのも事実です。親の介護など家庭の事情があって、それどころじゃないと。でも、そういう人の中にも『あなたたちが私のやりたいことを代わりにやってくれてると思うから』と言ってカンパをくれたりします。だから、やれる人からやっていて、少しずつ輪を拡げていく努力をすればいいんだと思います」と話されました。

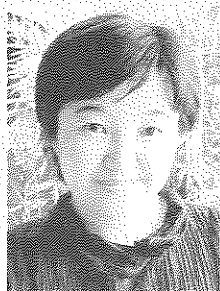
「まちに住む」価値観を

まちづくりを考える上でのポイントとして高田さんは、①「住み心地」から「住みごたえ」を追求する(経済的な生活水準を落としても、人間らしい生活、満足感を求めていくような価値観を育てていく)、②住宅というハコの中に暮らすより、「まちに暮らす」価値観をつくっていく(まちに住むことの意味を一人ひとりが考える)、という二つを示されました。

森さんは、「私は『家に住む』というのではなく『まちに住む』という感じで、あらゆるまちの施設を活用してきました。喫茶店を応接間に、図書館を書庫に、児童館やレ

森まゆみさん

東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。出版社勤務を経て、84年、季刊の地域雑誌『谷中・根津・千駄木』を創刊。近代建築の保存や上野不忍池の保全にも関わり、NTT全国タウン誌大賞、サントリー地域文化賞などを受賞。著書に『抱きしめる東京』(講談社)、『明治快女伝』(旬報社)、『一葉の四季』(岩波書店)、『こんげんは夢を盛るうつわ』(みすず書房)など。現在、月刊『大阪人』に「森まゆみのおまかせ案内」を連載中。



ストランで子どもたちの誕生パーティーを、という感じです。そうやって、まち全体を自分のフィールドにしてきたおかげで、3人の子どもをまちの中で育てることができました。他人の子が人間らしく育つことは、自分の子も人間らしく育つことの保障になりますから、みんながまちじゅうの子どもに気をかけることが大事です。まちづくりを考えると、次の世代を育てることも大切な要素です」といいます。

また、「価値観を共有することは大事ですが、価値観は時代によっても場所によっても変化するものだと思います。バブルの頃は田園調布に家を建てるのがあこがれだったのに、いまはゼネコンや行政も、歴史の文脈を大事に、まちの資源を大事にしようといいはじめています。昔、たとえば江戸時代は地主が土地に対して無限責任をもって、治水や道路の管理までいろいろやってくれまし

た。でもいまは土地に対して責任をもつ人がまちの中にいません。『儲かるから』というだけで地主や大家になる人は、そこまで考えないので、まちに規範がなくなってしまいました。中心になるリーダーや規範がなくなったから、民主的なルールでこのまちの規範を新たに作ろうとしたとき、『このまちでは何が大切なのか』を全員で話し合える関係ができていくかどうかです。幸せの形はバラバラで、いろいろな形態があるので、多様性の確保が大事でしょうね」という意見も述べられました。

最後に高田さんから「上本町の日赤病院周辺で、都市再生のプロジェクトが実施されています。一人でも多くの住民が参加して、地域の人が中心になってなんとかやっていけないかと模索中です。みなさんのご協力をお願いします」と締めくくられました。

翌日の29日には、京都大学大学院の学生さんを中心となって、「場所地図ワークショップ



プ〜上町界隈の魅力・資源探し〜」が行われました。約15名の参加があり、それぞれに魅力的な場所や資源を発見し、まちに愛着を感じたようです。

来春には、新しくTMO「上町台地のまちづくりを考える会」が正式に発足する予定です。市民参画のまちづくりが各地ではじまっていきそうな予感のする寺子屋トークでした。

「東京vs大阪≠中央vs地方」

山口洋典さん

((財)大学コンソーシアム京都
NPOスクール事務局長／大阪
大学大学院人間科学研究科)



するかのような大規模事業が構想されることもあるが、いまこそ持続可能な都市再生が必要ではないか、という問いかけをなされました。

これを第一番手に受けたのは、自ら大阪市内中心部にお住まいの弘本由香里さんでした。

弘本さんは、都心居住において安全で安心できるまちをつくるには、住民がまちとつながりをもっていくことが重要であり、お仕事で関わった「大阪市立住まいのミュージアム(大阪暮らしの今昔館)」設立のご経験から、個人の住まいと商いの空間とが均衡する都心居住は、歴史の積み重ねることでもいわれぬ雰囲気、に包まれ、結果としてそれらが都心で住む人たちの心の安定感となっていると話されました。

二番手の渥美公秀さんは、都心に住みたいとは思わなかったが、親の住処を考えると便利な都心の方がいいのでは、

と考えるようになったそうです。そして、都心に住む魅力というのは、誰かわからない人から見られている時間と、誰かわからない人を見ている時間が多く、そんな孤独を楽しむところにあるのではないかと語られました。

第2部の後半では、ゲストそれぞれが東京と大阪の双方の事例を対比することで、結果として都心居住の総論を深めることができました。高田さんからは「住み心地から住みごたえ」、「家に住むからまちに住む」といったように言葉を置き換えて考えることが都心居住の価値を考える上では大切である、そんなまとめがなされました。

なお、今回は「上町台地のまちづくりを考える会(仮称)」との共催で行われ、今後、上町台地で、副題の「タウンマネジメント入門」を具体的かつ丁寧に議論する場として継続した企画が実施される予定です。はたして、どのようなまちができていくのか、楽しみなところですよ。

Club Topics

舞台芸術祭

SPACE×DRAMA2003 参加劇団決定!!

～2次選考会を終えて～

来年夏に開催する[舞台芸術祭SPACE×DRAMA2003]。参加劇団を公募したところ、26劇団から申し込みがありました。提出された書類を読むと、どれもみんな熱い思いがあふれていて、書類だけではとても選ぶことができません。そこで、4日間にわたって2次選考会を行い、全劇団と直接会って話をし、選考メンバーで議論を重ねました。最終7劇団を選ぶまでの経過を、ご報告します。

〈選考メンバー〉

秋田光彦(應典院住職)
西島 宏(寺町倶楽部運営委員)
池野 亮(寺町倶楽部事務局次長)
川井田祥子(應典院ディレクター)
柳澤 尚 樹(應典院スタッフ・舞台芸術祭担当)

◆なんと26劇団!

前号でもお伝えしたように、来年の舞台芸術祭に向けて準備を進めています。マスコミや他の劇場の協力も得ながら、チラシの配布、ホームページやメールでの呼びかけ、ダイレクトメールなどの方法で、6月下旬から募集を開始。9月20日の締切までに、大阪はもちろん、京都や神戸、滋賀県からも申し込みがあり、予想をはるかに上回る応募数にうれしい悲鳴をあげながら、劇団から提出された書類に目を通しました。そして、「書類選考だけでは無理」と判断し、10月1〜4日にわたって2次選考会を実施。各劇団を代表してきたメンバーに、応募動機や演劇に対する考え方を発表してもらった後、選考メンバーとの質疑応答。どの劇団からも「このチャンスを生かしてステップアップしたい」「自分たちのレベルがどの程度なのか、しっかり批評してほしい」という思いが

伝わってきて、「選ぶ」ことのむずかしさを痛感しながら、5人の選考メンバーで真剣に話し合いました。

◆可能性を秘めた表現者たち

選考に際してポイントとなったのは2点で、まず「表現の可能性」があげられます。これは、寺町倶楽部の会則に謳われている「創造性ゆたかな地域社会の発展に寄与」「芸術文化活動の基盤づくり」という活動指針に基づき、既成の演劇表現にとらわれない、実験的で新しい試みを積極的に支援していこうというもの。評価基準が明確でなく「わかりにくい」といわれる現代演劇の中でも、先駆的な表現はとくに受け入れられにくく、表現者たちは孤独な闘いを強いられています。時代を先取りする鋭敏な感覚をもった若き表現者たちを支援することによって、多様な表現が保障される芸術文化活動の基盤づくりをめざします。

また、應典院という劇場の規模を鑑み、「活動をはじめてまもない劇団が、ここで力をつけてより大きな劇場へと巣立っていくような、スタートダッシュの時期の支援」と位置づけ、対象を活動年数5年以内

の劇団に絞ったこととも関係しています。

◆“演劇の場を創る”パートナー

2つめのポイントは、「劇団と劇場との関係の深化」。関西の演劇界の現状を見据え、「私たちにできることは何か」を考え、新しい取り組みです。

具体的な手だてとして、まず最初に全参加劇団による“制作チーム”を発足させます。来年夏の公演まで定期的にミーティングを開催し、「よりよい作品」「よりよい舞台芸術祭」を創り上げることをめざします。これは、劇団同士はもちろん、劇団と劇場の間でも率直な意見交換を行うことを意味し、「劇場を借りる＝貸す」という関係からさらに一歩踏み込んで、「演劇の場を創り上げる」ためのパートナー・シップの構築です。

“コミュニティ”とも呼べるような関係性を互いに築きながら、より広い視野に立って活動できる演劇人が自然に育っていく場を創ることこそ、應典院寺町倶楽部と應典院の果たすべき役割ではないかと考えます。

今後の動きを見守りながら、ご支援ご協力をお願いいたします。

◆2次選考で選ばれた劇団◆

・「劇団アクスビ」(ゲキダン アクスビ)
①堤俊樹 ②2002年8月③大阪府豊中市
・「劇団鹿殺し」(ゲキダン シカゴロシ)
①坂田菜摘子 ②2000年1月③兵庫県西宮市
・「しかばんび」(シカバンビ)
①大橋学 ②2001年4月③大阪市
・「千年枕」(センネンマクラ)
①松木麻里子 ②1997年6月③大阪市
・「特攻舞台Baku-団」(トコウブタイ バクダン)
①杉岡亮介 ②2000年11月③大阪府高槻市

・「満月動物園」(マンゲツドウブツエン)

①戒田竜治 ②1999年2月③大阪市

・「me-te-lui-lui×××」(メテルイルイ)

①山本セリ ②1999年10月③大阪府堺市

◆次点となった劇団◆

・「月曜劇団」(ゲツヨウ ゲキダン)

①竹中諒 ②2000年3月③兵庫県西宮市

・「Blue, Blue,」(ブルーブルー)

①渡辺雅英 ②1997年9月③兵庫県西宮市

※①代表者氏名 ②活動開始日

③主な稽古場所

COMMONS FESTA

コモンズフェスタ2002
対話のレッスン～communication studies～
いよいよ11月4日からスタート!!

コモンズフェスタの開催がいよいよ迫ってきました。ここでは、中でも寺町倶楽部主催の主な催しをご紹介します。

※詳細については、同封の総合パンフレットをご覧ください。

【オープニングイベント】

Part1...

パフォーマンス「まるで。」

Part2...

参加団体によるプレゼンテーション

「コモンズ流“対話のレッスン”とはじめ」

Part3...

オープニングパーティー

11月4日(月・振休)、13:00スタート

参加費500円

【Art Collaboration Project】 By Your Side

アーティスト●井上廣子&田尻麻里子

キュレーター●中西美穂

11月4日(振休)～10日(日)、入場無料

・ギャラリー・ツアー

11月4日(振休)14:30頃～

・アーティストトーク

11月8日(金)19:00～21:00

※参加費500円(飲物付)

Make Up Community



マスコミから注目を浴びている「からほり倶楽部」。空堀周辺の長屋など、古いまちなみを保存・再生することを軸に、大阪らしい文化・芸術の創造のためのまちづくりをめざす市民団体です。代表を務めるのは建築家の六波羅雅一(ろくはら・まさかず)さん。“市民発”のまちづくりは、「コモンズ」にも通底するものがあります。

歴史(とくに日本史)と、お城・地酒・温泉をこよなく愛する六波羅さんにお話を伺いました。

そもそも、私が空堀に興味をもったのは、「建築家として長屋の改修を手がけてみたい」と思ったのがきっかけです。この地域は戦災を免れたので、大正時代に建てられた木造家屋がたくさん残っています。大阪の都心でありながら100軒以上も長屋があるし、路地や坂道の風景が昔なつかしいような、魅力的な場所です。ただ、誰も住む人がいなくなって傷みの激しくなっている長屋が多いので、「場当たり的にではなく、木造家屋の特徴を活かした改修をしてみたい」と考えました。

さっそく大家さんに申し出てみたら、「何しに来たんや。サギ師ちゃうか」っていう感じで、追い返されてしまったんです(苦笑)。貸してほしいと頼んでもまったく

信用されず、お手上げの状態。でも、放っておいたら建物は朽ちるだけ、どうしていいのかわからないまま、「ここで何かせえへんか」と仲間呼びかけました。

2001年4月に、空堀商店街界隈長屋再生プロジェクトを発足。しばらくして、ホームページを見たアーティストから、「空堀でアトリエを構えたい」「ここで何かやってみよう」というメールが数多く届きました。まちの魅力や雰囲気から創作意欲をかき立てられたんでしょうね。昔から住んでいる人は「こんなまち、どこがええねん」といいますが、若いアーティストには魅力がいっぱい。そこで、アーティストの力を借りて、昔からの住民に“まちのよさ”に気づいてもらおうと、「からほりアートイベント」

——コミュニティな人々 六波羅雅一さん

を11月に開催することにしました。

はじめての試みで何もかも手探りでしたが、「ここでこけたら終わりや」と、仲間と一所懸命に取り組んだところ、なんと2500人もの参加がありました。マスコミにも取り上げられ、イベント後も各地から人々がやってくるようになったので、商店街の活性化にも少しはお役に立てているようです。私たちを怪訝そうに見ていた住民との距離も少しずつ縮まってきましたし、何よりもうれしいのは、「生まれ育った空堀のまちづくりに関わりたい」と、からほり倶楽部の活動に参加する人が増えたことです。

今年7月には長屋を改装した集合店舗「惣(そう)」がオープン。「惣」とは、江戸時代の大坂の町衆の自治組織を意味するもので、現代版の自治組織になるように育てていきたいですね。私たちはまちづくりのプロではないので、自分たちのできることをやっていくしかありませんが、自己満足に陥らないようネットワークを拡げていきたいと思っています。寺町倶楽部さん、これからよろしくお付き合いください。

應典院 掲示板

来る10月20日、應典院の本寺である大蓮寺にて私の晋山式が勤められます。晋山式とは新住職の就任式で、当日は浄土宗のお坊さま、檀信徒を中心にのべ400名近い方々にご参拝いただく予定です。

大蓮寺は、創建以来450年の歴史を持つ名刹で、広大な墓道を有する堂々たる檀那寺です。昔も今も大勢の檀信徒のみなさんに支えられ、伝統の年中行事や法事、葬儀などを通して、教化にあたってきました。たとえば、いきなり老舗の総本家に戻るようなものですが、むしろこれは「逆行」などでは決してありません。

むしろ、應典院という特殊な器を移し変えて、その真価がいよいよ問われてくると思います。同時に、本来の仏教の姿を社会に対し、私なりの取り組みで開いていく、その貴重な門出になると思います。新しいお墓「自然」とエンディング・サポートは、まさにその試金石ともいえます。

以後、私の肩書きは「大蓮寺住職・應典院主幹」となります。どうぞ引き続きよろしくお願い申し上げます。

■池野亮さん徒弟に

應典院再建以来、

事務局長として活躍

中の池野亮さんが、

このたびご縁あって、

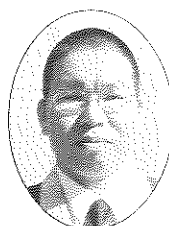
私の徒弟として浄土

宗の僧籍登録を完了

しました。すでに得度

を済ませ、現在は浄土宗教師の資格をいただくための、少僧都養成講座を受講中です。

順調にいけば、足掛け3年の後2004年の暮れには、晴れて一人前の僧侶となる予定です。従来の應典院の業務に加え、大蓮寺の法務や寺務にも関わって



いくことになります。はじめて弟子を育てる、という責任も重大ですが、身近に信頼できるお坊さんの仲間ができて、心強い気がします。

■上町台地のまちづくり

昨年来、関わってきた上本町コミュニティネットワーク構想ですが、それに火をつけられた格好で、このたび新しくTMO「上町台地のまちづくりを考える会」を発会させました。

恵まれた生活環境である上町台地における“都心居住”の価値を高めよう、というのが会の趣旨。行政と市民、地域住民とNPO、大人と子どもなど、いろいろな

ものを出会わせ、つなぐ、地元の間接機関をめざしています。

これを機に、まちの仕掛け人ともネットワークを拡げており、来春の正式発会に向け準備が進んでいます。

■都心で暮らす、都心でつながる

上記のTMOが、9月28日の寺子屋トークに続いて企画したイベントが、来る11月8日開催の「都心で暮らす、都心でつながる」(会場：應典院)。都心で生きる楽しみを“つながる”をキーワードに、多彩なゲストを招いて議論します。

町家再生、地域通貨、アート、情報誌等々、まちづくりの苦楽を話し合いながら、これからの都心居住のモデルについて探ります。ゲストは、からほり倶楽部の六波羅雅一さん、NPO政策研究所の木原勝彬さんら。一般1000円。申し込みは、080-5710-8297。

■ヘルスケアの講演

財団法人たんぼの家・芸術とヘルスケア協会共催の「ケアする人のケア」日米共同プロジェクトの大阪フォーラムが、来る11月5日、大阪国際交流センターで開催されます。

とくに魂の営みとして、アートを取り入れたアメリカの臨床ケースなど、実際の当地の研究者をふたり招いて討議します。大阪会場では、私がまとめ役をいただいており、「痛みをわがちあう文化の創造」と題して、日本仏教のケアの特質についてお話ししようと思っています。

参加費2000円(学生1500円)。申し込みは、0742-43-7055(たんぼの家)。

テロ1周年、平和誓願の集い

衝撃のNY同時多発テロから1年、去る9月10日には一心寺三千仏堂で、三帰会主催による「仏教者による平和誓願の集い」が開催されました。

三帰会とは、下寺町の浄土宗寺院の若手の会で、これまでも毎年子ども向け教化事業を実施してきましたが、今回初の一般向け企画として半年前から準備が進められてきました。

当日は、音楽法要と佛教大学・藤本浄彦先生の講演の2部構成で実施され、120名の会場一杯の力強いお念仏の音が響き渡りました。とくに音楽法要では、私も正式な法衣をつけて出勤させていただきましたが、東西の旋律が融合した、荘厳な法要となりました。本当の宗教が人類の平和に貢献できるよう、私たちに何ができるか、これからは考えていきたいものです。

